

特 集 「2015年度人工知能学会全国大会（第29回）」

特集「2015年度人工知能学会全国大会（第29回）」にあたって

安藤 真一（実行委員長，NEC），柏原 昭博（プログラム委員長，電気通信大学），
山田 誠二（大会委員長，国立情報学研究所）

2015年5月30日（土）～6月2日（火）までの4日間、函館市にて2015年度人工知能学会全国大会（第29回）を開催した。例年にならない、今年も参加されなかった会員のため、あるいは大会の総括として本特集を企画した。

本大会では会場として公立はこだて未来大学をお借りした。人工知能学会では例年、他学会とは会期が異なる5～6月に全国大会を開催している。これは学際的な特性をもつ本学会の会員の利便性を考慮してのことであるが、時期的に大学を利用することが難しく、1000名以上の規模で10以上の並列セッションが実行できる会場を確保するのに毎年苦勞している。今年は公立はこだて未来大学に特別に休校措置を取っていただいたことで、久々の大学での開催となった。おかげで北海道という人気の高い土地で、皆が参加しやすい土日を含む会期に開催することができ、さらには昨今のAIブームも加わって今年も大変盛況な大会となった。発表件数が630件と昨年度の好調を維持しつつ、参加者数については約1200名と昨年度比2割増の大幅な増加となった。この参加者数は学会発足当初の最も会員が多かった時期の大会参加者数に匹敵する数字である。ただし例年以上に現地での参加申込みが多く、事前にここまでの参加者増を想定できなかったため、大会会場や交流会会場の混雑、また会場までの交通の確保不足などの不備も出てしまった。この場を借りてご不便をおかけした参加者の方々にはお詫び申し上げるとともに、会期中もぎりぎりまで対応いただいた公立はこだて未来大学の現地委員やその他関係者の皆様には感謝の意を示したい。

さて今年もさまざまな企画セッションが行われた。公開討論「人工知能学会 倫理委員会」では、昨年本学会内に新たに設置された倫理委員会のメンバを中心に、最近盛んに取り沙汰される人工知能技術の社会への影響が議論された。

昨年度に引き続いて開催されたパネル討論「ロボットは東大に入れるか」では、同プロジェクトのディレクターである国立情報学研究所の新井紀子先生から本プロジェクトに対する熱い思いが語られた。

また特別セッションとして「認知科学とAIの再会」と題した日本認知科学会とのコラボレーションセッションが開催された。本セッションでは学習、表象、知性を題材とした三つのセッションが行われ、両学会から最新の成果をもち寄り活発な議論がなされた。

特別セッション「人工知能研究拠点の設立」では産業

技術総合研究所に設立された人工知能研究センターの紹介とともに、その拠点としての可能性や期待について議論がなされた。

公開イベント「コンピュータ囲碁はどこまで人間に迫れるか」では、函館市に縁のあるプロ棋士下坂美織二段に対して、コンピュータ囲碁プログラムZENがハンディをもらって挑んだ。先の学会参加者に加えて多くの一般来場者を集め、大変盛況なイベントになった。

招待講演として本大会ではお二人にご講演いただいた。北海道大学の湊真一先生には「『フカシギの数え方』から広がる知能情報処理アルゴリズム技術」と題して、動画「フカシギの数え方」の制作秘話などユーモアあふれる楽しい講演をいただいた。またクリプトン・フューチャー・メディア株式会社代表取締役の伊藤博之氏には「『初音ミク』の現在・過去・未来」と題して、バーチャルシンガー「初音ミク」の生み出したさまざまなムーブメントをご紹介いただいた。おのおの詳細については、次ページ以降に続く各担当者からの報告を参照されたい。

最後に、本大会の交流会はJR函館駅前に位置するロワジュールホテルを会場とし、これも久々の屋内での開催となった。北海道の旬の食材を使った料理と、公立はこだて未来大学中島秀之学長お勧めの地元の日本酒を取りそろえ、さらに地元縁の伝統芸能とゆるキャラ（イカール星人）による余興を用意した。結果的にではあるが、余興は堅実さと寛容さが共存する人工知能学会らしい組合せになった。

来年度の全国大会は6月6日（月）～9日（木）に北九州市で開催する。次回は第30回という節目の大会でもある。ぜひ来年も多くの皆様に参加いただき、盛り上げていただければ幸いである。



図1 会場となった公立はこだて未来大学